

マッチ・ペルトネン「マイクロストリアにおけるマイクロとはなにか？」

Matti Peltonen, “What Is Micro in Microhistory?”, Hans Renders, Binne de Haan (eds.), *Theoretical discussions of biography: approaches from history, microhistory and life writing*, Brill, 2014, pp. 105-118.

紹介

本論考では、経済学、社会学、歴史学においてマイクロ・マクロという概念が導入される過程が概観される。特に焦点が当てられているのは、1970年代末に新たに登場したマイクロストリアにおいて、マイクロという概念がどのような新しい意味で用いられたのかについてである。

○マイクロストリアという概念の登場¹

- ・カルロ・ギンズブルグの論文「証跡 — 徴候解読型パラダイムの根源」²（原著、1979年）は、「新しいマイクロストリア」を打ち立てたテキストの一つとしてときに読まれてきたにもかかわらず、このテキストではマイクロストリアという語は一度も使われていなかった。
- ・この論文におけるギンズブルグの目的は、19世紀末に生じた人間科学における新しい認識論的モデルの発見に注意を向けることであった。この新しい知識の在り方は、トマス・クーンの用語から「パラダイム」と名付けられた。
- ・「徴候解読型パラダイム」(evidentiary paradigm)あるいは「徴候による方法」(the method of clues)が意味しているのは、一見すると取るに足りない周辺的な行為、無意識的にあるいはルーチン的になされた行為を徴候として解読することである。
- ・ギンズブルグは、美術史家ジョヴァンニ・モレツリ、シャーロック・ホームズ、ジグムント・フロイトによって用いられている方法の共通の特徴を比較している。さらに彼は、狩人、占い師、賢者、自然科学の実験的手法にまで及ぶ壮大な歴史を有する「徴候による方法」を比較した。
- ・マイクロストリアという概念が、歴史学における特殊なアプローチを意味するものとして紹介されたのは、カルロ・ギンズブルグとカルロ・ポーニの共著論文「名前とゲーム—

¹ ○で表記した小見出しはレポート作者が付した。

² この論文には邦訳がある。カルロ・ギンズブルグ（竹山博英訳）「徴候——推論的範例の根源」『神話・寓意・徴候』せりか書房、1988年、177-226頁。

—不均衡な交換と歴史学の市場」(原著、1979年)においてであった³。

- ・ギンズブルグとジョヴァンニ・レヴィによって提唱された新しいミクロストリアの共通の特徴は「徴候による方法」であった。この方法が意味しているのは、奇妙で説明を要するような事柄から研究を始めるということである。異常な事件や現象が、より大きな、しかし隠されている未知の構造の徴候として受け取られることになる。
 - ・ミクロストリアの特徴である、個別の異常な事件とより大きなコンテクストとの関係は、「時間的な相」(temporal aspect)として考えることができる。
 - ・ギンズブルグの徴候論文では、「徴候による方法」の重要な特徴すべてが描かれたわけではなかった。エドアルド・グレンディによる「正規なる例外」は当然言及されているが、ジョヴァンニ・レヴィによる「観察規模の縮小」については言及がない。さらに、この論文ではミクロやマクロといった概念は使われていないのである。
- ➡では、こうした概念はどこから来たのか？それはミクロストリア研究にどのような影響を与えたのか？

(1)「ミクロとマクロ」(Micro and Macro, pp. 107-110)

○経済学においてミクロという概念はどのように使われていたか

- ・ミクロ・マクロという概念が経済学から歴史学を含むすべての社会科学に導入されたのは、1940年代末から1950年代初頭の時期であり、経済学では短期変動(short-term change)、長期変動(long-term change)という古い区別に代わって、ミクロ・ダイナミクス、マクロ・ダイナミクスという区別が使われるようになった。
- ・1940年代末から1950年代初頭以前には、経済学の方法論における短期変動と長期変動との違いは時間的なものだった。経済学者がミクロ・マクロという概念を使い始めたとき、両者の違いは空間的なものになり、かつての時間的基準による区別はすぐに忘れられてしまった。
- ・1950年代からミクロは個人あるいは企業を意味するようになり、マクロはこのような基本単位から構成されるもっと大きな集団を意味すると考えられるようになった。
- ・ところが、質的にまったく異なるミクロの単位同士をどのように一つにつなげるのが問題になった。この問題は、ミクロからマクロのレベルに移動したところで、そこから新しい情報が何も得られなければ、つまらぬ操作をするはめになるのではないかという懸念に基づいていた。

³ 歴史学分野文献レビュー(Ginzburg and Poni 1991(1979))を参照のこと。

- ・たとえば、市場における独占、寡占競争を分析したいときに、その市場に関わっている諸企業がみな似通ったものであったとすれば、この市場をどのように眺めればよいのか。アルフレッド・マーシャルは、完全に擬制的・分析的な単位である「代表的企業」(representative firm)を分析することで、すでにこの問題を解決していた。
- ・経済学者は実際に存在する経済的単位について議論できない場合には、代わりに擬制的な解決策を用いるのである。

○社会学においてマイクロという概念はどのように使われていたか

- ・20 世紀における経済学の学問的成功が社会科学や人間科学に影響を与え、マイクロ・マクロの区別に関する方法論的概念が他の社会科学や歴史研究においても部分的に採用されるようになった。
- ・こうした影響の重要な側面は、社会現象のマイクロなレベルが個人、企業、行為者、主体を意味すると考えられるようになったことである。
- ・1960 年代になると、社会学研究においてマイクロ現象とマクロ現象との区別がさらにはっきりしてきた。社会学の多くの方法が再考され、そうした方法のうちのいくつか(エスノメソドロロジー、シンボリック相互作用論、など)は社会のマイクロなレベルを強調していた。
- ・これらの新しいアプローチは、古い「マクロ社会学」(macro sociology)や還元主義的推論(reductive reasoning)に対して批判的だった。
- ・この問題は、しばしば「方法論的個人主義」(methodological individualism) というもっと古い概念によって分析されていたが、この概念が意味しているのは、社会に関するマクロな概念は、それが個人のレベルで説明される人間行動から引き出しうる場合にのみ受け入れるということだった。
- ・マイクロのレベル(あるいは個人の行動)へと還元するこのような見方は、マイクロとマクロの間の移動が何ら新しい情報をもたらすことがなく、ある意味では無駄であるということを暗示していたのである。
- ・1960 年代の社会学の新しいアプローチは、社会生活におけるマイクロのレベルの根本的な重要性を強調しようとしていた。それはときに、マクロのレベルの現象を分析することが完全に無駄であると考えるほどに過激だった。
- ・こうした新しいマイクロの社会的アプローチにおいては、マイクロのレベルが個人の相互作用として、つまり原理的には人間行動の短期的事件であるところの人と人とのコミュニケーションとして理解されたのである。しかしながら、社会学においてさえ、マイクロとは何かという定義の時間的側面はいつも簡単に忘れられてしまい、空間的側面が

優位となった。

- ・そのため、個人の相互作用の代わりに、社会のミクロのレベルは、社会構造というマクロのレベルに対して、社会的行為者(social agents)や主体のレベルとして理解されるようになっていった。このような行為者/構造(agent/structure)の区別への移行は、理論的な注意を払っている社会学者によって批判されることもあり、ミクロ・マクロのリンクはもっと歴史的な方法で明示する必要があるとされた。

○経済学と社会学に共通する問題

- ・経済学と社会学においては、ミクロとマクロの間を移動しても何か新しい情報を発見するのは困難だという問題があった。
- ・経済学と社会学におけるミクロ・マクロの区別の問題は、経済学と社会学の異なる歴史を反映するおなじ困難の表と裏である。この問題は、ミクロ・マクロのリンクを行為者/構造の関係として見ることのうちに、またミクロ・マクロの区別を概念化する際の時間性から空間性への移行のうちにある。

(2)歴史研究におけるミクロのアプローチ (Micro Approach in Historical Research, pp. 110-114)

○新しいミクロストリア以前におけるミクロストリア的な考え方

- ・ミクロストリアという概念はイタリアで登場したが、1970年代の初頭には、英語圏の歴史家によってミクロ・マクロという概念を使うことなしにミクロストリアの考え方が議論されていた。エリック・ホブズボームとエドワード・P・トムソンは、暴動や革命のような例外的な事件を研究することが、隠された構造を明るみに出し、沈黙のうちにおかれている人々の生活の諸側面を広く記録するのに役立つと強調していた。
- ・こうした研究の例としては、次のような諸研究をあげることができる。
- ・E. J. Hobsbawm, *Primitive rebels: studies in archaic forms of social movement in the 19th and 20th centuries*, Manchester University Press, 1959. [E. J. ホブズボーム(水田洋ほか訳)『素朴な反逆者たち: 思想の社会史』社会思想社、1989年]
- ・E. P. Thompson, *Whigs and hunters: the origin of the Black act*, Pantheon Books, 1975.
- ・Natalie Zemon Davis, *Society and culture in early modern France: eight essays*, Stanford University Press, 1975. [ナタリー・ゼーモン・デーヴィス(成瀬駒男ほか訳)『愚者の王国異端の都市: 近代初期フランスの民衆文化』平凡社、1987年]
- ・Emmanuel Le Roy Ladurie, *Montaillou, village occitan de 1294 à 1324*, Gallimard, 1975. [エマニュエル・ル・ロワ・ラデュリ(井上幸治ほか訳)『モンタイユー: ピレネーの村 1294

～1324』上・下、刀水書房、1990-1991年]

- ・ラデュリの『モンタイユ』は、フランスの歴史家ミシェル・ド・セルトーが支持したアプローチにもっとも近い。セルトーは「重要な逸脱」(significant deviation)という概念を導入したが、それはイタリアのミクロストリアの「例外的な正規」(exceptional normal)⁴とそれほど違いはない。
- ・マルク・ブロックも『歴史のための弁明』(原著、1949年)において、革命や自然災害のような例外的、破壊的な事件の潜在的な重要性を論じていた。
- ・方法論的な語彙を比較してみると、イタリアの歴史家とイギリスの社会史家は、歴史学理論の展開において異なる二つの時期に属していることがわかる。新しいミクロストリアとその特殊な語彙の出現においてきわめて重要な時期だったのは、1970年代の後半であった。実際、ミクロストリアの先駆的なモノグラフであるギンズブルグの『チーズとうじ虫』〔原著、1976年〕ですら、ミクロストリアという概念を使っていない。

○新しいミクロストリア以後(人類学の影響)

- ・マイクロ・マクロのリンクの問題は、1970年代後半から1980年代前半に歴史研究に導入された。
- ・新しいミクロストリアには以下のような特徴がある。
 - ①「マイクロ」と「マクロ」という概念の使用
 - ②ギンズブルグによって導入された「徴候による方法」
 - ③分析を小さな「規模」に縮小することの強調
 - ④事件や現象の特殊な性格を定義するものとしての「正規なる例外」という概念→ここでは、とくに③に注目する(マイクロ・マクロの区別に密接に関係しているから)。
- ・ミクロストリアには人類学の影響があった。
- ・レヴィによれば、観察規模を縮小するという考え方は人類学者の議論から生じたもので、1940年代にまでさかのぼるといふ。ギンズブルグとポーニも1979年に観察規模の縮小に言及し、人類学と歴史研究の接近についてコメントしていた⁵。
- ・新しいミクロストリアの歴史家によってしばしば引用される重要なテキストの一つは、クリフォード・ギアツの論文集『文化の解釈学』(原著、1973年)に収められた論文「厚い記述」である。
- ・ギアツは「顕微鏡的観察」(microscopic observation)という概念を提示したが、彼はまだ

⁴ この概念は「正規なる例外」(normal exception)と互換的に用いられる。

⁵ 歴史学分野文献レビュー(Ginzburg and Poni 1991(1979))を参照のこと。

- マイクロとマクロとか、マイクロ・マクロのリンクといった概念は使用していなかった。
- ・ところが、「厚い記述」の冒頭でギアツは、のちの新しいマイクロストリアにおいて重要となる考え方について論じていた。
 - ・マイクロストリアの歴史家の多くは、「人類学者は村を研究するのではなく、村に身を置いて研究するのである」というギアツのスローガンを引用してきた。一つの村や一人の個人はそれ自体として「マイクロ」ではない。なぜなら、それらは「マクロ」として理解される社会過程に参加しているからである。新しいマイクロストリアという概念が想定しているのは、マクロのレベルの現象が、マイクロのアプローチで照らし出される諸事件のなかにも現れているということである。
 - ・人類学がもたらしたもっとも重要な教訓のひとつは、マイクロとマクロを相対概念とみなすということだった。一つの小さな事件、マイクロストリアの歴史家が最初に注目する周縁的で不明瞭な徴候は、それ自体として小さいのではなく、もっと大きな、あるいはもっと長期の事柄との関係においてのみ小さいのである。

(3)マイクロストリアとバイオグラフィ研究(Microhistory and Biographical Research, pp. 114-118)

- ・上で例を挙げた歴史学の諸研究は、主役となる個人に関して、ありとあらゆる情報の断片を利用している。だが、これらはバイオグラフィとは異なっている。
 - ・なぜなら、これらの研究においては、そうした個人よりも仮説や理論の方が探求の対象となっているからである。特に強調されていなくても、こうした研究のほとんどが近代化論をそれぞれの仕方で問題にしていることは明らかである。
- ➡では、バイオグラフィと新しいマイクロストリアはどのような関係にあるのだろうか。
- ・マイクロストリアがバイオグラフィ研究に与えた影響の一つは、時系列(chronology)を捨てて、「横向き」(sideways)にバイオグラフィを書く方法の例を示したことである。
 - ・シモーネ・レッシグ(Simone Lässig)によれば、現在のバイオグラフィ記述の傾向は、直線的な物語的アプローチに代わって、不連続な(discontinuity)アプローチの方向、同じ生がさまざまな観点から語られ、解釈されるようなモンタージュや複数視点の構造の方向を向いているという⁶。
- ➡しかし、そのようにして書かれた研究はバイオグラフィというより、マイクロストリアであるということもできる。
- ・最後に、社会科学とマイクロストリア（歴史学）の違いは何か。

⁶ Simone Lässig, 'Introduction: Biography in Modern History – Modern Historiography in Biography', in Berghahn and Lässig, *Biography Between Structure and Agency*, Berghahn Books, 2008, p. 10.

- ・社会科学においては、社会がどのように機能するか、個人がどのように行動するかということについて理論を作り出すのが通例である。こうした理論は、ふつう認識論的な意味において議論されることはない。ところが、マイクロストリアのアプローチは大部分が認識論的であり、新しい解釈や仮説を作り出すための新しい情報をどのように獲得するかについて示唆を与えてくれる。社会科学においては、マイクロ・マクロの区別が社会構造に関する信念を確認するための教義であるのに対して、歴史家にとってのそれは道具なのである。